

追検査

令和二年度 学力検査問題

国語

(九時二十五分～十時十五分)
(五十分間)

受検番号 第 番

注 意

- 1 解答用紙について
 - (1) 解答用紙は一枚で、問題用紙にはさんであります。
 - (2) 係の先生の指示に従って、所定の欄二か所に受検番号を書きなさい。
 - (3) 答えはすべて解答用紙のきめられたところに、はっきりと書きなさい。
 - (4) 解答用紙は切りはなしてはいけません。
 - (5) 解答用紙の＊印は集計のためのもので、解答には関係ありません。
 - 2 問題用紙について
 - (1) 表紙の所定の欄に受検番号を書きなさい。
 - (2) 問題は全部で五問あり、表紙を除いて十四ページです。
- 印刷のはっきりしないところは、手をあげて係の先生に聞きなさい。

中学生の「僕」(樹)は、祖父の所有する水晶に触れて鉱物に興味をもった。ゴールデンウィークに、祖父の知人である社会人の律さんとその仲間の楠田さんの二人に連れられ、初めての鉱物採集に新潟県糸魚川市の親不知海岸まで来た。

「樹君、こっちに来てごらんよ。翡翠がいっぱいあるよ！」

手招きをされるままに、僕は並べられている翡翠を覗き込む。小さな石や大きな石がごろごろと入っている袋が、比較のお手頃な価格で売られていた。

「翡翠って書いてありますけど、これ、全部翡翠なんですか？」

「そうだよ。全部、糸魚川で採れたんだ。」

律さんの代わりに、売り場にいたおじさんが答えてくれた。

「でも、緑色じゃないですよ。駅前にあつた大きな翡翠も白っぽかったですけど、翡翠って、緑色だったような。」

「ああ。緑色だと、いかにも翡翠って感じだけどね。緑色だけじゃなくて、ラベンダー色や黒色もあるんだ。勿論、白いのもね。」

「ラベンダー色や、黒も？」

僕が目を丸くしていると、律さんはポンと僕の肩を叩く。

「同じ種類のはずなのに、違う色の鉱物があるだろう？ それと同じさ。微量に混じつた不純物によって、石の色が変わるんだよ。」

①「あつ、蛍石も、緑や紫がありますしね。」

僕は合点がいった。でもまさか、翡翠も色とりどりだったなんて。

「でも、そうなると翡翠を見分けるのが難しくなりますね。僕は、緑っぽい石を探す気でいたんですけど。」

「そうすると、きつね石を掴まされちゃうわけさ。」

翡翠売りのおじさんは、にやりと笑った。

きつね石という石の名前は、祖父のノートにも記されてあつた。祖父もまた、翡翠だと思つたものがきつね石だったとノートの中でばやいていた。

「きつね石も、翡翠じゃないとはいえ、綺麗だし珍しい石なんだけどね。」

後ろで話を聞いていた楠田さんが、苦笑する。

きつね石というのは変成岩の一種で、糸魚川特有のものらしい。緑と白が混じつたような綺麗な岩石で、緑の部分はニッケルを含有した石英や、ニッケルとクロムを含有した白雲母からなるらしい。白い部分は、石英か霰石とのことだった。

「おつ、よく知ってるねえ。学生さんかい？」

翡翠売りのおじさんは、感心したように言った。地学を専攻していると思われたのだろう。楠田さんは困つたように笑つて、首を横に振つた。

②「ただの石好きですよ。地学を学校で勉強出来たら良かったんですけど。」

楠田さんは、少しだけ寂しそうだ。それを見ていた律さんも、ちよつとだけ複雑そうな表情をしたのであつた。

僕は翡翠売りのおじさんに別れを告げると、海岸までやつて来た。

一面の砂浜を想像していたけれど、親不知海岸は違つた。

「砂利………浜？」

目の前に広がっているのは、砂ではなく無数に集まった小石であつた。恐らく、上流から運ばれて来た石なのだろう。小さな石だけではなく、中には、僕の顔ほどの石もあつた。

「樹君、替えの靴は持つて来てる？」

「ビーチサンダルなら……。」

僕の答えに、「あちゃー。」と律さんは顔を覆った。

「ごめん、ごめん。ちゃんと言っておけばよかった。この海岸、砂じゃなくて小石だから、ビーチサンダルだと歩き難いんだよね。」

「歩き難いどころか、足とサンダルの隙間に石が入りますよね……。」

想像するだけで、足の裏が痛くなる。

「マリンシューズでもあるといいんだけど。」

「楠田さんは、マリンシューズなんですか？」

「うん。これなら、小石はほとんど入り込まないしね。」

楠田さんは、リュックサックの中からマリンシューズを出してみせる。伸縮自在なので、履いたら足にフィットしそうだ。そうなると、小石が入り込む隙間はないのだろう。

③「もし、良い靴が見つからなかったら、これを貸すよ。」

「えっ、でもそうしたら、楠田さんが……。」

「私は、糸魚川に来たの初めてじゃないし、また来ようと思ったたら来られるから。」

「どうして、そこまで……。」

本当はお礼を言った方がいいのだろうけれど、楠田さんのあまりにも真っ直ぐな目に、つい、そんな質問が口を突いて出た。

すると、楠田さんは困った顔もせず、首も傾げず、迷うことなくこう答えた。

「樹君には、たくさん石に触れてもらいたいからね。」

「どうして……初対面の僕に、そんな……。」

「樹君はまだ、選択肢があるからかな。」

軽い口調で言われたはずの言葉は、僕の中ではやけに重かった。

「さつきも気になってたんですけど、楠田さんは地学専攻とかではなかったんですよね？」

「うん。本当は地学をやりたかったんだけど、地学関係は潰しが効かないからって、親に猛反対されてね。大学では、潰しが効く無難な学科を専攻して、今は普通の会社員をやりつつ、石を集めているわけ。」

「親に……。」

鸚鵡返しにそう言う僕に、「そう。」と頷いてくれた。

「別に、会社員が悪いってわけじゃないんだけど、若い頃にやっておきたかったことって、ずっと引きずるんだよね。」

「鉱物の採集も、やりたかったことの一つなんですか？」

「そうだね。地学系のサークルがある大学に入って、仲間と一緒に色んな産地に行きたかったなあって。大人になっちゃうと、お金を稼ぐことは出来ても、時間を作ることは難しいから。」

ままならないね、と楠田さんは言った。僕が、頷いていいものかどうか悩んでいると、その言葉には続きがあった。

「だけどもあ、今はSNSもあるし、それで律君や他の石仲間とも会えたしさ。何とかやりくりして、出来なかったことを埋めていこうと思ってる。」

「とても、いいと思います。」

僕はそう言うので精一杯だった。

楠田さんの目はとても真っ直ぐで、一生懸命に前を向こうとしていた。その双眸は、陽光を受けた水晶のようだと思った。

※「ピクチャーストーンが好きなのも、見方が自由なところにひかれたのかもしれないね。自然が描

いたものを、自分なりに見立てられて、そこに間違いも正解も無いところがいいんだと思う。」

「間違いも、正解も無い……。」

「物事って、基本的にはそうだと思うんだよね。人は正解を探そうとするけれど、それってただの大多数の意見に従っているだけだったりするし。こうしたら正しいと言えるほど、単純でもないと思うんだ。」

楠田さんはそう言って、水平線の向こうを見やる。遠くの景色は陽炎かげろうのように揺らめき、蜃気楼しんきろうがぼんやりと浮かび上がっていた。

僕はそれをしばらく眺めていたけれど、ぼつりと話し出す。

「僕、大人になるってことについて、ちょっと怖くなって思ってたんです。」

「へえ？」

今度は自分が話を聞く番だと言うように、楠田さんは僕の顔を覗き込む。

「楠田さんが言ったように、大人になると時間が無くなってよく聞くんです。両親も、仕事や家事が忙しそうで、あまりゆっくり暮らしているようには見えないし。」

朝から晩まで仕事をして疲れ切ってしまうので、昔やっていた趣味とも疎遠になってしまふ、というのを聞いたことがある。母も絵を描くのが趣味だったらしいが、久しく筆を握っていないとほやいていたこともあった。

「祖父は多趣味だったんですけどね。でも、大人になって働き出したら、お爺さんおじいになるまで趣味に没頭出来ないのかなと思うこともあって。」

「まあ、確かに。私の周りでも、そういう話は結構聞くね。学生時代の友達とも、ほとんど会えてないって話も。」

楠田さんは、うんうんと頷いた。

「でも、楠田さんや律さんは、仕事をやりながらも折り合いをつけているし、ちゃんと自分がやりたいことが出来ていて、いいなって思っんです。僕も何とかやりくりして、二人のような大人になりたいって。」

「えっ。」

僕の言葉に、楠田さんは目を丸くした。

「そ、そんな風に言ってもらえるような大人じゃない気もするけど。本当に、ただ好きなことをやってるだけだし。そりゃあ、やりたいことはやって欲しいと思うけど、私は特に見本になれるような大人じゃないっていうか……。」

楠田さんはしばらく恐縮していたけれど、ふと、僕の目を見つめてこう言った。

「とにかく、自分がひかれるものには、どんどん踏み込んだ方がよいよ。まあ、人に迷惑を掛けることだったら、ちよつと待ってと思うけど、そうじゃなかったらとことんやってみてもいいと思う。」

「自分がひかれるものには、どんどん踏み込む……。」

「そう。踏み込んでみないと分からないこともあるしね。どうか、頑張って。」

楠田さんはそう言って、ニツと歯を見せて笑った。

頑張るってという言葉には、祈りが込められているように感じた。自分と同じように、後悔することが無いようにと。

④「頑張ります。」

僕は、深く頷く。楠田さんはそれを見て、少しばかり安心したような笑みをこぼした。

(蒼月海里著『水晶庭園の少年たち 翡翠の海』による。一部省略がある。)

(注) ※翡翠……宝石の一つ。古くから珍重され、日本では新潟県で見いだされた。

※ピクチャーストーン……ここでは、模様が絵のように見える石のこと。

問2 次の——部の文節と——部の文節の関係を、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

通学の 電車の 中では ずっと 本を 読んで いる。

- ア 主・述の関係 イ 修飾・被修飾の関係
ウ 補助の関係 エ 並立の関係

問3 次の——部と同じ構成(成り立ち)になっている熟語を、あとのア～オの中から二つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

新緑が華やかに森を彩る。

- ア 握手 イ 厳守 ウ 思考 エ 熱心 オ 問答

問4 次は、Aさんたちが、宮沢賢治みやざわけんじについてグループで発表するための図書館での話し合いの様子と、その話し合いに用いた図書館の【調べ案内】です。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

話し合いの様子

Aさん「私たちのグループは、宮沢賢治について発表することになりました。今日は、実際に調べていこうと思いますが、まず、どういう手順で調べるか話し合います。この【調べ案内】を見て、何か気づいたことのある人は、発言してください。」

Bさん「この【調べ案内】によると、参考図書にもいろいろな種類がありそうです。」

Cさん「まずは参考図書で、宮沢賢治についての基本的な知識を得るのはどうでしょうか。」

Aさん「いいと思います。でも、【調べ案内】によると、参考図書は、I となっているので、コピーをしてもらうか、その場でメモをする必要があるようです。」

Bさん「そうですね。参考図書で概要を調べた後に、宮沢賢治の代表的な作品について、発表資料に入れる作品を、いくつか絞っていくのはどうでしょうか。」

Cさん「賛成です。作品の紹介は、それぞれが興味をもった作品について、教室や家で読んでから話し合うのがいいと思います。」

Aさん「いいアイデアですね。では、早速本を探しに書架へ行きましょう。」

作家に関する資料・情報の集め方

事典・辞書・ハンドブックなど、調べ物に使用する本を参考図書といいます。当館では請求番号の頭にRを付けており、一般とは別の書架に置いてあります。

参考図書は、書架から取り出して自由に閲覧することができますが、館外への持ち出しはできません。館内での利用となります。使用した後は、書架に戻すか、カウンターに返却してください。

1 作家について基本的な知識を得る

- ① 百科事典
- ② 文学関連の事典

ア 作家について調べられる事典類
イ 作品について調べられる事典類

③ 特定の作家の事典

著名な作家については個人事典が出版されていることがあります。図書館で検索機を使って本を探す際に、フリーワード検索で著者名を入れて検索するほか、書名のところに著者名を入れて検索してみると意外な発見があるかもしれません。

(1) 話し合いの内容と【調べ案内】をふまえて、Aさんの発言の空欄

I

にあてはまる

言葉を、【調べ案内】から七字で書き抜きなさい。(3点)

(2) 賛成です。作品の紹介は、それぞれが興味をもった作品について、教室や家で読んでから話し合うのがいいと思います。とありますが、この発言についての説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

- ア 自分の立場を明らかにしてから、意見を述べている。
- イ 話し合いの意図を確認するため、繰り返し質問している。
- ウ 自分の意見を述べるとともに、共通点を再確認している。
- エ 中立的な立場で課題を整理し、問題点をまとめている。

(3) Aさんは、宮沢賢治の作品について調べたことを、次のようにまとめました。空欄

II

【まとめの一部】

どっどどど どどどどど どどどどど
青いくるみもふきとばせ
すっぱいくわりんもふきとばせ
どっどどど どどどどど どどどどど

(宮沢賢治著『風の又三郎』による。)

この部分には、II が使われています。私は、この表現の工夫がとても気に入っています。

- ア 切れ字
- イ 体言止め
- ウ 反復(繰り返し)
- エ 直喩

3 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(26点)

稽古は何を目指すのか。舞台(試合・パフォーマンス)が「成功する」と喝采を浴び、注目され、社会的評価を受ける。そして次の依頼が来る。それは稽古する者にとって喜びであり励ましである。

ところが、そうした成功とは別の「納得」がある。世阿弥は「落居」という。「然るべき過程を踏んだ後に、落ち着くべきところに落ち着いた」とでも理解するしかない、ある種の満足・納得である。

本書は「成就」と呼ぶ。世阿弥もこの言葉を使ったが、特に「成功」と対比させて用いたわけではなかった。それに対して本書は、世阿弥の「落居」を「成就」と理解し、「成功」と対比的に用いる。

成就是、成功と重なることもあるが、重ならないこともある。重ならない場合、たとえ結果がよくななくても「成就した」と実感される。然るべき稽古を積んだ後に、落ち着くべきところに落ち着いたという特殊な満足感である。個人的な思い込みではない。あるいは、自分で自分を納得させようとするのではない。当事者の実感としては、何の迷いもない、誰から批判されようと、そう思わずにはおれない、手応えのある納得なのである。

どうやら稽古は「成功」を目指しつつも、同時に、それとは別の位相の「成就」を求めている。良い成果を得ることが目的であるのだが、同時に、よい成果が出ようが出まいが、それとは関係なしに、稽古それ自体に意味があると考えている。

そのつど欲をろ過してゆくプロセス自体に意味がある。身体※のゼロポイントに戻り、そのつど新しく、その時その場の状況に対応してゆくという、そのこと自体に意味がある。正確には、そのゼロポイントにおいて「場の全体エネルギー」が顕現するということに意味があると考えているのである。

こうした「場の全体エネルギー」を、日本の伝統は「道」と呼ぶ。この「道」は、一方では、個人が歩む道であるが、他方では、「タオ(道)」の顕れである。

前者に做えば、人は、芸道、武道など様々な「技芸」を通して、道を極める。それは、その技芸を高めることであるとともに、それを通して人格を磨くということでもある。

他方、後者に做えば、「道」は、道教(タオイズム)の「タオ・道」に近く、森羅万象すべての根底をなす宇宙エネルギーである。そのエネルギーが顕れ出る。稽古とは「道」が顕れる機会、道が成就する機会である。

重要なのは、「道」が主語になっっている点である。人間の願いが成就するのではない。あるいは、人間が道を歩き、何かを達成するのではない。道(タオ)が顕れ出ることこそ「成就」という。

そう考えてみれば、成功と区別された「成就」とは、演技者の私的な満足ではないどころか、人間の側の喜びでもなくて、まずは、宇宙エネルギーが歪められることなく舞台(試合)の中に顕れ出る出来事を指していたことになる。

ちなみに、そう考えると、「道場」という言葉も、「道(タオ)が顕れ出る場」と理解される。特定の稽古場に限らない、日々の暮らしのすべての場面が「道場(道が顕れる場)」となる。

禅の思想は「行住坐臥」という。「歩いたり止まったり座ったり寝たり、状況に即して、そのつど適切に対応することが、すべて道である」(馬祖「馬祖の語録」)。

世阿弥もこの言葉を使う。「日々夜々、行住坐臥に、この心を忘れずして、定心につなぐべし」(「花鏡」第十四条)。心の稽古は舞台に限らない。日々の暮らしのあらゆる瞬間に、心の集中を緩めることなく、油断せず、心の張りを貫くこと。日々夜々、行住坐臥、そのすべてが、「タオ・道」の顕れる場面であり、道場ということになる。

こうして稽古の思想は「日々の暮らし」を重視する。日々の暮らしがそのまま稽古になる。

日々の暮らしの「常」が大事なのである。そう確認したうえで、しかし稽古の場合、丁寧に考えなければならぬ。ひとつは、わざの完成だけが目的ではない、もうひとつは、やはり芸の稽古を大切に、という点である。

まず、わざの完成だけが目的ではない。内面の成熟がなければ、わざが完成しない。この「内面の成熟」は（人格の変容、人間性の成長、内的自由の獲得などとも言い換えられるが）、「人間を磨く」という言葉と重なる。わざの稽古は、わざの習得を通して人間を磨くことであり、逆に、人間を磨くことがなければ、わざが完成しない。

ということは、稽古は、一方から見れば、直接的に「内面の成熟」を追究することをせず、わざの習得という回り道を介して、間接的に人間を磨くのであるが、しかし、他方から見れば、そのわざの習得は、内面の成熟があつて初めて完成する。

ドイツの哲学者・ボルノーは、この点を、わざが「完成すること」と、それを「持続させること」の違いとして説明する。完成したわざは日々衰えてゆく。それを「持続させる」ためには、内面の成熟が不可欠である。日々新たに、内面的な成熟を続けてゆくのだから、わざを持続することはできない（ボルノー『練習の精神』）。

ところが、第二に、やはり「わざ」が大切である。日々の暮らしが大切なのだが、しかしそれは、地道な「わざ」の稽古を土台にして初めて成り立つことである。わざの稽古を疎かにして、日々の暮らしだけ大切にしても、稽古にはならない。

※鈴木大拙が「せぬときの坐禅」と面白いことを語っている。「坐禅する」に対して「坐禅せぬ」というのであるから、日々の暮らしの中すべての行いが坐禅になる（「せぬときの坐禅」、「足を組まない坐禅」になる）。

しかし「せぬときの坐禅」の方が大切というわけではない。むしろ、しっかり時間を確保して「坐禅」してこそ、「せぬときの坐禅」が意味を持つ。両者ともに大切と言えば簡単だが、実際は、互いが互いを乗り越え合うような緊張関係を伴っている。「坐禅」がなければ「せぬときの坐禅」は成り立たず、「せぬときの坐禅」によって支えられなければ「坐禅」が成り立たない。

あらためて「成功」と「成就」を思い出す。たとえ成功しなかったとしても、稽古は、稽古それ自体で意味がある。しかしそうした語りが、「成功」を徹底して追及する気迫と両立する。互いに互いを批判し合う緊張関係にあると同時に、互いに補い合う関係にもなっている。

「必ず成功せよ」と「成功がすべてではない」。その二つの教えが、稽古の思想の中では、特殊な仕方両立しているのである。

（西平直著『稽古の思想』による。一部省略がある。）

（注） ※身体ゼロポイント……ここでは、稽古で無心の境地に至ること。

※馬祖……中国の僧。（七〇九〜七八八）

※鈴木大拙……日本の仏教学者。（一八七〇〜一九六六）

※坐禅……禅の精神修行の方法。座禅。

問4 ④ 稽古の場合、丁寧に考えなければならない。とありますが、次は、筆者が考えるわざの稽古と日々の暮らしについて説明したものです。空欄にあてはまる内容を、内面の成熟、土台の二つの言葉を使って、四十五字以上、五十五字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。(7点)

わざの稽古は、日々の暮らしとともに大切だが、

55	45				

ということ。

問5 本文の構成や表現の仕方について述べた文として適切でないものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(5点)

ア 筆者は、まず、世阿弥の「落居」と、この文章での「成就」の意味を説明した上で、「成功」と「成就」を対比的に用いながら論を展開している。

イ 筆者は、「舞台(試合・パフォーマンス)」のように、言葉の後に、かっこをつけて言葉の説明を補うことで、読者の理解の手がかりとしている。

ウ 筆者は、「行住坐臥」の説明では、複数の文献から引用することで、自身の主張の根拠を明確にして、説得力のあるものになっている。

エ 筆者は、鈴木大拙の言葉から、「せぬときの坐禅」について、あえて自分の考えに反論する内容を示すことで、論の正しさを印象づけている。

4 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)(12点)

① 夜話に云はく、昔、魯仲連と云ふ將軍ありき。平原君が国にあつて、能く朝敵を平ぐ。……
平定した

平原君賞じて、数多の金銀等を与へしかば、魯仲連辞して云はく、ただ、將軍の道なれば、敵を討つのみなり。……賞を得て、物を取らんがために非ず……と云ひて、敢て取らず……と云ふ。

魯仲連が廉直とて、名譽の事なり。

俗、なほ賢なるは、我、その人として、その道の能をなすばかりなり。代りを得んと思はず。修行をしていない俗人でも。

学人の用心も、かくの如くなるべし。仏道に入り、仏法のために諸事を行じて、修行者の心がけ

代りに所得あらんと思ふべからず。内外の諸教に、皆、無所得なれとのみ勧むるなり。……
仏教やその他の諸々の教え

〔「正法眼藏随聞記」による。〕

(注) ※夜話……ここでは道元が弟子に語った仏教の訓話をいう。

※平原君……古代の中国にあった趙の国の大臣。

※朝敵……ここでは平原君の治める国を包圍した敵軍のこと。

※廉直……心が潔白で、正直なこと。

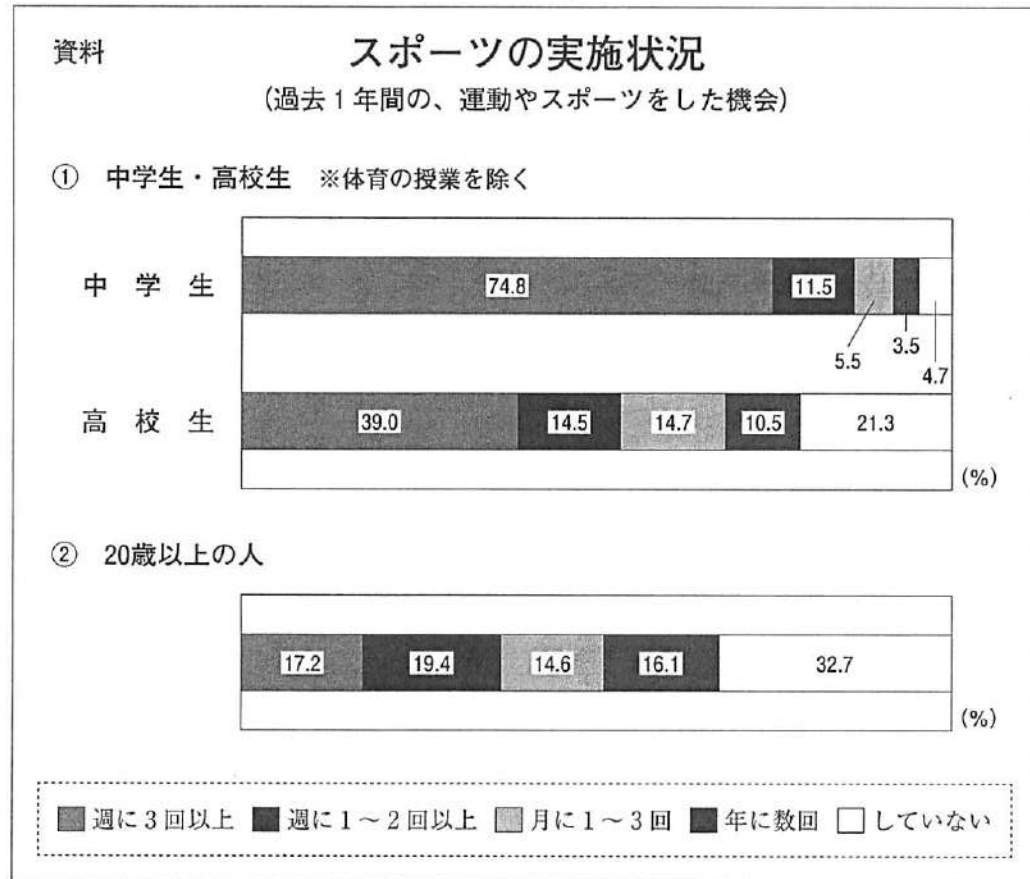
問1 与へしかばとありますが、この部分を「現代仮名遣い」に直し、すべてひらがなで書きなさい。(3点)

問2 夜話に云はくとありますが、これに続く「昔、魯仲連と云ふ將軍ありき。」で始まる夜話の終わりの部分を、本文中の「ア」の中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

問3 魯仲連辞して云はくとありますが、平原君の申し出を断つた理由として最も適切なものを、次の「ア」の中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

- ア 敵を討つことが將軍として当然の役目であると考えから。
- イ 戦において多くの敵を討ち取ったことを悔やんでいたから。
- ウ これまでも十分に褒美をもらっており、満足していたから。
- エ 褒美をもらってしまつて將軍の道が閉ざされてしまつから。

次の資料は、ある中学生が「スポーツの実施状況」について発表した資料の一部です。
 国語の授業で、この資料から読み取ったことをもとに、一人一人が自分の考えを文章にまとめる
 ことにしました。あとの(注意)に従って、あなたの考えを書きなさい。(12点)



埼玉県「スポーツに関する県民意識・実態調査」から作成
 (平成28年度調査)

(注意)

- (1) 二段落構成とし、第一段落では、あなたが資料から読み取った内容を、第二段落では、第一段落の内容に関連させて、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえてあなたの考えを書くこと。
- (2) 文章は、十一行以上、十三行以内で書くこと。
- (3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

(以上で問題は終わりです。)

